論　説

『リア王』と過剰のイデオロギー

中　野　弘　美

O! reason not the need; our basest beggars
Are in the poorest thing superfluous:

序

ヤコブ・ブルクハルトとカール・マルクス．1818年生まれの二人は共に（とはいってもそれぞれ別々に）「ルネサンス」を創りだした．それは古代地中海世界の再生ではなく，近代の曙としてのルネサンス像であった．ルネサンスは近代初期として位置づけられ，ギリシア・ローマ文化を再認識するというより，近代社会の準備期間として定義された．ブルクハルトの『イタリア・ルネサンスの文明』（1860）はルネサンスに個人主義の衣を着せ，マルクスの『資本論』（1867）は資本主義の衣を纏わせた[1]．ブルクハルトの歴史学はルネサンス研究に subject（思考し行動する主体）という媒体を提供し，マルクスの経済学理論は object（物／商品としての客体）という媒介物を与えた．

ブルクハルトのサブジェクトとマルクスのオブジェクトは互いを排除しあう．ブルクハルト的な個人とはその人自身の才能を基に開花する．個人としての主体は神や世界から自らを切り離し特権化する．人間は神の僕ではなく自らの主人なのだ．ブルクハルトはダンテやアルベルティの内に個として自立する人間主体を見てとったのである．一方，商品としての物は生産者から自らを切り離し，市場の中を戯れる．マルクスのいう商品は，例えば中世の職人の作る製作物とはちがう．職人の作り出す机は製品ではあるが商品ではない．なぜならそれは，作った本人が使っても封建領主が使っても，製作者との関係を常に保っているからである．しかしその机が別の何か（例えば金銭）と交換されたとき，ただちにそれは価値システムの網の目に組み込まれ，それまで保持された労働（力）との関係は物どうしの関係に摩り替わっていく．商品はそれ自身の交換価値に基づいて流通することになる．

個人と商品は互いを疎外しあいながら共に流動性の運動を展開する．ブルジョワ的主体は階級社会の境界を侵食しながら上昇をつづけ，資本主義的商品は市場の中を自由に浮遊する．その先にはブルジョワ・デモクラシーとしての近代政治学と，キャピタリズムとしての近代経済学が待っている．人と物の活発な動きそのものが，不活性の「暗黒時代」からの分離の印であり，ルネサンスという歴史上の一時期を近代の胎動期として位置づけたのである．

ブルクハルトとマルクスの思想は，当然のことながら，16世紀後半から17世紀前半の英国演劇に関する近年の議論の布石となっている．ジャン＝クリストフ・アグニューは，劇場と市場の地理的近接性を強調し，二つの制度の成功の要因を流動性という共通項にしぼって論じた[2]．ダグラス・ブラスターによれば，劇場とはすなわち市場であり，二つは商品化と消費の欲望の渦巻く構造的に相同なメカニズムに他ならない．マーケットが金銭をベーコンの厚切りに変えるのと同じように，劇場は入場料を復讐のファン

タジーに変えるのである[3]．ロンドンの劇場は強力な変換装置として機能する．そこでは名も無い役者が歴史上の大人物に変容し，金銭がスペクタクルに変貌するのだ．

シェイクスピア演劇の中でも特に『リア王』(1605 - 6) はこうした文脈で読まれている．「昔々あるところに.....」で始まる非 - 歴史性の枠組みが取り外され，特定の歴史的コンテクストの中に位置づけられてきたのである．多くの批評家が，一つの社会体制から別の体制（すなわち封建主義から近代資本主義）への移行，ならびに一つの人間類型から別の類型（封建的な忠誠心の保持者から計算合理性に基づいて自己の利益を追求する者）への移行に伴う諸現象をドラマ化したものとしてこの劇を読んできた[4]．中世から近代への移行という大きな歴史的コンテクストの徴候的なテクストとして，『リア王』は繰り返し語られている．しかし問題は，ルネサンスを近代の始まりと位置づけることに性急になりすぎてはいないかということだ．もちろん，シェイクスピアの時代のイングランドに個人主義や資本主義の動きが見られないと言うつもりは毛頭ない．ただ，後世の視点からそうした胎動を歴史上の支配的な動静として安易に措定してしまうことは，危険ではないだろうか．『リア王』を初期近代の徴候的なテクストとみる見解を括弧に入れて，ブルクハルトとマルクスが強調したもの，すなわち人と物の自由な戯れをこの劇がいかに封じ込めようとしているか，それを明らかにするのが本論のねらいである．

物と人

古代ブリテンの王リアの悲惨な体験と忠臣グロスター伯爵の経験する苦悩とのプロット上の相同性は，研究者の間で常識として流通している．だが奇妙なことに，クウォート版 (1608) のタイトルページは別の事実を示唆している．「リア王と三人の娘の生と死の真実．ならびにグロスター伯の相続人にしてベドラムのトムを哀れにも偽装せるエドガーの不運.」[5] サブプロットの主役は，実は，グロスターではなく嫡子エドガーなのである．グロスターの悲運はたしかにリアの苦境に似ている．二人は共に血を分けたわが子に裏切られる父親だ．しかしエドガーをめぐるエピソードは国王の遍歴と重要な共通点を有している．二人は共に財産を奪われた男たちなのである．リアとエドガーは互いの類似性に言及する．「不孝な娘でなければ，いやしくも人間をこんな浅ましい者にすることができるものか.」(3.4.69 - 70) リアは裸同然のトムの姿をみて，彼もまた娘たちに全てを剥ぎ取られたのだろうと想像する．一方エドガーはリアにたいする同情に自らの情況を重ねあわせてこう語る．「おれを屈ませるものが国王をうな垂れさせているので，この苦痛も今は軽くなり，こらえ易くなったようだ．王は子のため，おれは親のためだ.」(3.6.109 - 10) メインプロットのリアとサブプロットのエドガーの運命をとおして，この劇は人間の存在と財産との関係を浮き彫りにする．ありていに言えば，財産を無くすことは，とりもなおさず，その人のアイデンティティを亡くすことを意味するのである．

何かを所有することが人として存在することと等価であるなら，非 - 所有とは非 - 存在，すなわち無に等しい．相続権を失ったエドガーは自らを「もうエドガーではない」(2.3.21) と断じ，王権を放棄したリアはフールに「今じゃまるで桁なしのゼロだ」(1.4.192) とからかわれる．ただこうしたレトリックはいささか事実とは異なる．リアはトムが全てを失ったと思って「お前は何も手元に残しては置けなかったのか．みんなやっちまったのか.」(3.4.64) と訊く．しかしフールがすかさず主人の発言を訂正する．「いや，腰布だけは残していますよ.」(3.4.65) エドガーは全てを失ったわけではないのだ．同じように，リアは娘たちに全てを与えたと言い張るけれど，実は「選りすぐりの100人の騎士」(1.1.132) を手元に残している．国王にも乞食にも手放さないものがあるのだ．彼らの手放さ

ないものは生存のために不可欠のものとは言いがたい．娘たちが指摘するように館には騎士の二倍の数の従者がいて，国王の身の回りの世話係には事欠かない．またトムの腰布はリーガンの豪奢なローブ同様，防寒効果がほとんど無い．彼は常に「寒いよ」(3.4.57; 170; 4.1.52) と震えている始末だ．トムの存在が示すように，風雨を避けるには物置小屋で事足りる．暖をとるには藁で十分．口にする物は「水に泳ぐ蛙，蟇蛙，オタマジャクシ，ヤモリ」(3.4.129 - 30) で十分．乾きを癒すには「溜り水を青い浮草ごと呑み下せば」(3.4.133 - 4) 足りるはずだ．にもかかわらず，人間には過剰な何かが必要であると国王は主張する．

リアは直属の軍隊を随行させる権利を弁じる際に，必要 (need) 一点張りの議論は的外れであると主張する．「おい，要不要の議論はいらん．極度に窮している乞食ですら，極端につまらない物ながら何か余計な物をもっている．」(2.4.264 - 5，エピグラフ参照) 全ての人間は国王から乞食にいたるまで必要以上のもの—余分なもの—を所有しなければならない．トムの腰布はそのような物であり，リアの100人の騎士と同じ価値を有する．それらは人間に付随するものでありながら，その人間にとって本質的なものとなる．リアが最後まで削減された騎士の数の回復に固執する事実は，極めて重要である．彼はトムを従者としてリクルートし，(妄想の中で) 鋳造した貨幣に騎士の姿を印刻し，直属の兵士を増員するため乱倫を奨励する．主人／所有者であるリアと家来／所有物である100人の騎士が分かちがたく結びついていることが，繰り返し言及される．

トムの腰布とリアの従者との間には思いのほか類似点がある．それらはいずれも身体を包みこむものであり，身につける者を保護し，身につける者に相応しい装いに他ならない．重要なのは，それらが機能的な類似性以上に物質的な親近性を有していることである．リアの従者たちは国王に仕える者に相応しい制服を支給されている．そのお仕着せは他の従者との差異を示す記号でもある．リアはトムを従者として召し抱える際，トムの服装に眉をひそめ，お仕着せを着用するよう命じる．「ただしその身なりは気に入らんな．ペルシャ式の服装だとそちは言うだろうが，取り替えるがよい．」(3.4.79 - 81) 腰布がお仕着せと交換可能な物品だという認識が，「余計なもの」をめぐるリアの議論を支えている．

リーガンの必要以上に豪華な外衣がいみじくも表象するように（「もしただ温かな服装をすることさえ贅沢なら，あまり温かくなりもしないのに贅沢にもお前が着ている物は，人間として何の必要があるのだ．」(2.4.268 - 70)），この劇は衣服を過剰なものの典型として位置づけている．暴風雨の中で保温機能さえ果たせない国王たちの衣服は，消耗品として脱ぎ捨てられるが，にもかかわらずそれは財産一般のメタファーとして機能している．このことは“accommodation”という単語の特異な使用法に表れている．リアの語る“unaccommodated man” (3.4.104) というのは「着るものもない裸の人間」のことを指しており，雑草を頭に冠したリアを見たエドガーが語る「王は自らをアコモデートしておられない」という台詞も，国王の身なり・服装に言及している[6]．建物や家屋等の不動産を意味する用語を意図的に衣服の意味に用いることで，『リア王』の演劇言語は動産と不動産の弁別を曖昧にしながら，財産所有という一般的な地平に私たちを誘いこんでいく．

プラトンにとって人間と動物の違いは理性を所有するか否かであった．ハイデガーにとってそれは手であり，ベルグソンにとっては笑いであった．リアにとってそれは「余計なもの」を所有することである．「人間が本来必要とする以上は授けられないとすれば，人の一生がつまらないことは鳥獣と同然だ．」(2.4.266 - 7) 国王でも乞食でも人間ならば，動物と自身を差異化するために余分な何かを持たなければならない．リアは階級間の差異を隠蔽しつつ，人間一

般を非‐人間（すなわち動物）と区別するレトリックを展開する．

イングランドでは当時，贅沢禁止法（sumptuary laws）の下に過剰一般が規制されていた．この法令は，ある社会階級の人間が別の階級に属する人間だと見えないようにする企図に基づいており，16‐17世紀を通じて何度か施行された[7]．贅沢禁止法は人間のアイデンティティを所有する物の中に閉じ込めるシステムである．例えば商人は絹を身にまとうことを禁じられたが，これは特定の階層の人間を特定の衣服に繋ぎとめる仕掛けとして機能した．だとすれば，リアの言う「余計なもの」とは単に人間と動物の差異を記すだけでなく，階級間の差異を明示し，既存の秩序を安定的に維持する役割をも担っているのではないだろうか．

ジェイムズ・カヴァナーが論じているように，エピグラフに挙げた必要と過剰をめぐるリアの言説は，たいていの人間が同意できるものでありながら，受け手の身分によって都合よく解釈できる類のものである[8]．人間にとって必要不可欠のものとは，生理的＝身体的生存に必要なものを超えたところにある．誰もが必要以上のものを必要とする．乞食がパン以上のものを必要とするのは，リアが国王としての特権を必要とするのと同断だ．リアはリーガンに向かって「お前は貴婦人だ」と呼びかける．“lady”とは貴族階級に属する女性にたいする呼称だが，その語が人類全体に呼びかける一連のレトリックの中に巧妙に埋め込まれ，人間／動物（非‐人間）の二項対立の構図の内部に位置づけられる．富める者も貧しき者も等しく必要以上のものを所有する権利があるといった言説をとおして，どの階級に属する主体も自分の居場所について心地よい想像上の位置づけを行うことが可能となる．リアの言説には，平等主義的見解の中に支配階級の利害を忍び込ませ，ブルジョワ民主主義に対抗するうえで戦略的に重要なイデオロギー領域（すなわちエガリタリアニズム）を，領有し統制しようする貴族階級の意志がうかがえる．人類共通の正義や理想の底に，ある階級の生活信条や身内意識がそっくり横たわっている奇妙さがここにはあるのだ．リアの言う「余計なもの」が支配階級の人間にとって必要以上に必要なものであるならば，それは階級的安定と社会秩序の固定化という文脈で捉えるべきものであろう．

このように考えると，ケントがオズワルドを蛇蝎のごとく忌み嫌う理由にも合点がゆく．このゴネリルの従者が「素性のわからん雌犬の小倅」（2.2.22）と罵られるのは，エドマンドと同様二つの階級の血が混じっているからである．彼の存在そのものが秩序転倒の可能性を孕んでいる．ケントはオズワルドを「この妾腹のゼッド野郎．いりもしないビリ文字め」（2.2.64）と罵倒する．ZはSで書き換えられるため，あまり目につかない文字である．当時の辞書ではZの項目はよく省かれていた．要するに彼は必要のない余分な存在であり，タイトな階級社会が排除すべき危険因子に他ならない．彼にはこの劇の世界観が嫌悪し恐怖するものを増殖させる力がある．異種混交．それは階層秩序を侵犯する病魔であり，人間を区分けする枠組みへの異議申立てである．

所有する主体と所有される対象は，劇構造の中で緊密に結合しているため，社会的行為は所有をめぐる語彙で語られることが多い．“to change one's copy”というイディオムがある．これは人が地所を得たり失ったりした結果，それまでの社会的な振舞いを変えてしまうことを意味する．“copy”とは“copyhold”のことであり，土地保有権の一般的な形態を指す[9]．ケントが伯爵としての優雅な振舞いを捨て，素行の悪い乱暴者に変わったのは，伯爵領を没収され国外追放の汚名を受けたことと不可分であり，グロスターが自殺を図るのも爵位と領地の喪失と切り離しては理解できない．だとすれば，冒頭のリアの振舞いとそれが産み落とした事態を考えるとき，国家を所有する主体がその所有物から自らを切断したとき何が起こるのかという

視座が必要となる．彼の意志（遺言）は自らの財産を正当な相続人に分配することであった．法的に有効なその遺言の驚くべき点は，どのように王国を分割するかということよりも，いつそれを行うかということであった．それは国王の死後ではなく死ぬ前になされた財産贈与である．『リア王』とは財産を失った人間についてのドラマなのかもしれない．

自発的に財産を放棄するリアの振舞いについては，興味深いことに，狂気に関する民間信仰や医療の言説が知見を与えてくれる．リアの錯乱は100人の騎士の随行をゴネリルに拒絶されたとき始まった．従者の削減は王の身体を削り取ることを意味するので，国王としてのステータスと人間／男性としてのアイデンティティは同時に危機に直面する．重要なのは，この時のリアの身体的反応が“hysterica passio”(2.4.55)の発作であったことだ．これはいわゆるヒステリー症状であり，当時の婦人科医学によれば，この発作にみまわれた男性は非‐男性化するといわれた[10]．リアは「女子供の武器である涙をもって」(2.4.271) 身を震わせながら泣きじゃくる．男でなくなった者は秩序の中心から排除される．なぜなら女性・道化・狂人は周縁的存在として位置づけられるからである．やがてリアは道化となり狂人となっていく．マイケル・マクドナルドによれば，狂気の徴候は自己破壊の形態をとり，破壊行動は身体だけでなく，所有物にも向けられたという．自傷行為の徴候の中に，居住する家屋を省みないこと，着衣にダメージを与えること等が挙げられており，特に衣服を引き裂く行為が多数報告されている[11]．こうした文脈にリアの行動を置いてみると，「支配も領土所有も」(1.1.49) 放棄し，非‐男性化し，居城からも出て，衣服を引き裂き，靴まで脱ぎ捨てる行動のひとつひとつが，正気からの逸脱のシグナルとなる．これに対抗しうる正気の唯一の徴候が，従者の保持にたいする執拗な要求なのである．

財産に固執するのはそれ無しでは正気でいることができないからである．だからこそフールは「何故カタツムリが家をもっているか知ってるかい」(1.5.27) と問うのだ．勘当され相続権を失ったエドガーは「俺はもうエドガーではない」と呟き，100人の騎士を奪われた国王は「これはリアではない」(1.4.226) と叫ぶ．エドガーのアイデンティティの喪失を私たちが知るのは，彼が終幕まで固有名詞で呼ばれることがないという事実をとおしてである．「俺は名前を失った．」(5.3.121) 彼に与えられるのは「哀れなトム」という総称名詞のみである．財産の消失と名前の喪失は同時に発生した．エドガーは宮廷人から狂人乞食に身をやつすが，その後の行動は余分なものの獲得をとおしてアイデンティティを回復するプロセスとして描かれる．リアから衣服をもらい，グロスターから金銭を得ることによって「不幸な乞食」は「勇敢な小作人」になり，コーデリアの軍勢と内通する間諜になり，弟に決闘を挑む無名の騎士になる．倒したエドマンドに対し「私の名前はエドガー」(5.3.170) と名乗ったときには，既に父親は死んでいる．グロスターは彼の名前を聞くと同時に悶絶した．爵位と領地を相続する者がたった一人生き残ったことになる．

オールバニ，コーンウォル，フランス，バーガンディ，そしてケント．上層階級に属する者たちのファーストネームは一様に欠落している．彼らは財産と結びついた名前で呼ばれる．だが，財産の所有と深く結びついているのは高貴な血筋の者たちだけではない．貧しき者たちのアイデンティティもまた財産と不可分なのである．下層階級の名もなき者たちに，リアは頓呼法（その場にいない人・物に呼びかける表現法）で呼びかける．「貧しい裸のみじめな者たち」(3.4.28)，「なんじ住む家もない貧しき者たち」(3.4.26) とリアは命名する．注意すべきなのは，貧しき者たちが衣服や住居等の財産を欠いた存在として定義されていることである．「ベドラムのトム」という名称は先に述べたように，固有名詞というより総称名詞にあたるのだが，そ

れもまた，貴族の呼称と同じように地所と結びついた個人名に他ならない．またエドマンドの名は登場人物一覧表には記載されていない．クウォート版，フォーリオ版（1623）ともに，“Bastard”とだけ記されている．「相続権のない妾腹」というのが彼の正式な名称なのである．極め付きはオズワルドだ．ケントは彼を嘲弄するとき「年三枚のお仕着せをもらい，給料が100ポンドだけで，汚い毛の靴下をはいている下郎」（2.2.16 - 17）と表現した．物・もの・モノのカタログがオズワルドの人となりを表象しているのである．動産の寄せ集めがすなわちオズワルドなのだ．

過剰なものの両義性

『リア王』は物と人との不分離性を戦略的に劇化する．私たちは再びエピグラフに戻らなければならない．「極度に窮している乞食ですら，極端につまらない物ながら何か余計なものをもっている．」いったいどうして「極度に窮している乞食」が「余計なもの」をもつことができるのか．いったいどうして「貧困の辛苦を味わ」（2.4.209）い「頭を入れる家もなくお腹が餓えかえって」（3.4.30）いる者が余分な何かを所有することができるのか．

この言説の非 - 論理性はイデオロギーの地平で考察しなければならない．もし貧しき者が必要以上のものを所有していたら，もはや彼は貧しき者ではないだろう．それはちょうど，富める者が必要以下のものしか所有していなかったら富める者ではないのと，意味論的には同じことだ．この言説の眼目は，既に述べたように，必要なものと余分なものを相対化することによって，貧しき者を貧しいままに，富める者を富めるままに固定することにある．社会的な位置関係によって必要なものも余分なものも姿を変える．リアの主張は欲求（need/want）と欲望（desire）を差異化すると理解しやすい．

英語のwantがよく示しているように欲求は何ものかが欠如しているがゆえにそれを必要とする行為である．欠如＝必要に基づく欲求はふつう生物学的＝生理的行為とみなされる．例えば，腹が空けば食物を欲求する．「食べる」はこの生理的＝身体的欠如を充填する充足である．したがって欲求は個別身体の必要に基づく．これに対して欲望は他者との関係の下でのみ生ずる社会的行為である．欲望は物を消費するのではなく，社会関係やそれについての観念または表象を消費する．例えば，他者に対して自己の社会的地位や権威を誇示するために豪華な浪費をしてみせる行為の背景には，他者による社会的評価という観念への欲望がある．一般に，欲望とは社会的承認を求める行為である[12]．

欲求は満たされるはずなのに何故それ以上を欲望するのだろうか．これがリアに突きつけられた問題である．ゴネリルから思いもよらぬ返事を聞いたとき，リアは「ここにいる誰でもわしを知っているか．ここにいるのはリアじゃない．……言ってくれる者はいないか，わしが何者であるかを．」（1.4.223 - 227）と問いかけた．もしゴネリルが娘としての孝行をしないのなら，自分は国王とは別人に違いない．リアはそう考える．重要なのは，彼の質問が“Who am I?”ではなく“Who is it that can *tell me* who I am?”だという点である．アイデンティティとは社会的なものであり，他者との関係の中で成立する．リアは他者からの承認を求めているのである．マルクスはいみじくも述べている．「ある人が国王であるのは他の人々が彼にたいして臣下として対するからである．だが，逆に，人々は彼が国王であるから自分たちは臣下なのだと思っている．」[13]

リアは「私の地位や価値を認めろ！」と執拗に要求している．では，乞食はどうだろうか．野ざらしでいつも空腹の彼らは何を（欲求ではなく）欲望するのか．乞食が知りうる唯一の剰余とは富める者からの「施し物」である．乞食と施し物は分離不能であり，施し物をとおして彼らは社会的に承認される．施し物は社会の上層から下層へ移動するが，その動きを引き起こ

すのは，実は，貧しき者たちに他ならない．乞食は富める者からのチャリティを強制できるのだ．逆説的に聞こえるが，当時の慣行がこのことを証明している．『リア王』が宮廷で上演された日は，クウォート版の記載によれば，クリスマスの翌日であった[14]．この日は St. Stephen's Dayと呼ばれており，貧しき者が富める者からの歓待と慈善を享受する権利を有する日なのである．この特別な日，彼らは貧しき者として社会的に承認される．彼らは慈善を施されるのではなく，チャリティを要求できるのだ．仮にこの要求が通らなければ，暴動の恐怖が富める者を脅かすことになる[15]．このような慣行＝実践が網の目のように張り巡らされた社会では，剰余の公平な分配に基づく社会的な平等思想は肯定的な意義を持ちづらい．というのも，そのような思想が，施し物を享受する貧しき者の権利あるいは欲望を奪うことに繋がると信じられていたからである．剰余を上層階級に留め置くことが，奇妙にも，社会の安寧を保証するとされたのである．

西欧社会で贅沢が上層階級の特権でなくなったのは，18世紀の半ばごろである．それまでの400年間，庶民の暮らしは本質的に同じようなものであった[16]．食事，飲み物，家屋，衣服の流行などが大衆の間で基本的に変わらなかったのは，「今ここにある物」でどうにか暮らしていけたからである．社会の上澄みのほんの一握りの者たちが享受した贅沢は，欲望を起動させる商品をとおして特定の階級の内側でダイナミックに多様化したが，やがてそれは「見えざる手」の機械論的な市場メカニズムによって，ゆるやかに下位の階層へと伝わっていった．

18世紀頃まで物の浪費は悪徳として非難されこそすれ，経済活動の刺激剤として推奨されることはなかった．長い間，luxury という語が lechery という語と同義であった事実は興味深い．二つの単語は共に「過剰な肉体的欲望」というシニフィエをもっており，カトリックの七大罪に名前を連ねるのは Lechery のときもあれば Luxury のときもあった．さらにテューダー・ステュアート時代の贅沢禁止法や国教会の説教の中でも，二つの語は交換可能であった．二つの単語の象徴するものは人間関係の秩序を脅かすに留まらず，人間の魂の安寧をも脅かすものとされたのである．この語を体現したのが他ならぬグロスターである．彼は「あり余るほど物をもち，食いあきるほどむさぼり食った．」(4.1.67) 彼は終始，経済的な浪費と性的な浪費を象徴する人物として位置づけられる．グロスターは眼球を刳りぬかれる．色欲と視覚機能の低下との間に特定の連関を認める文化では，それは淫乱の報いとされる[17]．目玉を抉り取られる前に彼の視力が衰えつつあることを，私たちは知っているが（1.2.35，3.4.117，4.6.136），極め付きはリアの命名する“blind cupid”(4.6.137) であろう．「ブラインド・キューピッド」とはロンドンでも有数の娼館の名前であり，性的浪費と金銭的浪費の体現者には実に相応しい呼称である[18]．グロスターのような貴族が淫行と姦通を繰り返すと父系の血筋の曖昧な私生児が増殖する．人間の区分けは階級秩序に基づいて截然となされるべきことがらであり，エドマンドやオズワルドの族が繁殖するのは社会の危機を意味する．『リア王』ではこの危機が増水と氾濫のメタファーをとおして前景化されていく．人間関係の微妙なバランスが溢れ出す液体によって崩れ去るのだ．

始まりは国王の眼から落ちる一粒の涙であった．自然界がそれに呼応し，遠くで雷鳴が聞こえるや否や暴風雨がやって来る．天空の水門は全開になり，大洪水とハリケーンが大地に襲いかかる．河川や湖沼の水位がみるみる上昇し，高塔も樫の巨木も浸水する．「瀧よ，竜巻よ，お前たちは水を噴出して高い塔を水浸しにし，その上の風見車を溺れさせてしまえ．」(3.2.2 - 3) あらゆる差異の体系は無定形の泥土に呑みこまれ，階級間の差異を曖昧にする者たちがうようよと這い出し，「恩知らずの人間を産み出すあらゆる種子」(3.2.8 - 9) が撒き散らされる．

涙，雨，そして精液の氾濫が表象するものは，貴族階級の威信を脅かす中産階級の財力に他ならない．貨幣を持っている階級が経済的な過剰を楯に，土地を持っている階級を侵蝕しつつある．溢れる水のメタファーが伝える過剰は，「余計なもの」の多寡によって固定されていた差異システムを無効にする圧倒的な力をもっている．分を越えた過剰が秩序を突き崩す情況の中で，『リア王』は分を弁えた過剰が秩序を安定化するという離れ業をやってのけようとする．ある者にとって過剰は社会を安定させる．けれども別の見方をする者にとって，それは社会を動揺させる．過剰なものに対するこの両義性がドラマの最深部に横たわっている．この劇は過剰なものの流出を社会の最上層部に留め置くことで，過剰なものの流動性を封じ込めようとしているのだ．

リアの財産は誰が相続するのか．彼には嫡出の男子がいない．嫡出の女子は全てこの世を去った．相続の恩恵に与るのはリアの名付け子だけである．過剰なものは全てエドガーに向かって流れ込む．持てる者の剰余が持たざる者に平等に分配されることはない．それは長子相続制という旧来のシステムに則って移動することになる．歴史学者のローレンス・ストーンは父権制について次のように述べている．

> 16世紀の貴族階級の家族は父系的・長子相続的・父権的であった．系図学や紋章学の精緻な調査により父方の祖先が明らかにされ，ほとんどの場合，爵位の継承は父方の家系による，という意味で父系的である．また，財産のほとんどを長子が受けとり，次子や末子は借金しないで暮らせる程度の年金か土地収入からの利子を携えて世間に出る，という意味で長子相続的である．さらに，専制君主に擬される絶対的な権威をもって，夫は妻を支配し父親は子供を管理する，という意味で父権的である[19]．

家族をとおして分節される父権制は，一般には自然な秩序と考えられていたが，もちろんそれは歴史的・文化的に構成されたシステムである．ストーンによれば，1580年から1640年まで，政治権力と宗教的権威が協同して家族における父親の権威の昂揚に努めた．テューダー朝とステュアート朝の統合に伴い，有力貴族に対する忠誠の度合いを低下させ，国王に対する忠誠心の発揚がもくろまれたが，そうした動きの一環として，家族構成員の家長への服従が国と家，王と父のアナロジーをとおして奨励された．国家権力は家族単位の父権制の強化に強い関心を示したのである．同時に国教会はカルヴァン主義の原罪・予定説の浸透をとおして，子供が父親に自発的に服従するよう動機付けを行った[20]．絶対主義君主による国民国家の成立と，中世的な大家族制から小（核）家族制への転換は，相互に依存しあいながらほぼ同時期に進行していったが，『リア王』はそうした社会・歴史的文脈に古代ブリテンのロイヤル・ファミリーを投げ入れたのである．王家のメインプロットとグロスター家のサブプロットが詳らかにしたのは，リアの試みが不可能であるということだ．物と人を分断することはできない．リアがリアであるためには王国を分離することができない．老王のアイデンティティは必要以上に余ったものによって構成されていたのだ．妾腹のエドマンドが掠め取った財産は嫡子エドガーに返還される．リアの放棄した王国はやがて彼の元に戻り，国王の死とともに名付け親から名付け子に譲られる．リアとグロスターが示した富の再配分のジェスチャーが結局はエドガーを利するように，父権制の主要素である長子相続制は再確認され，剰余の流動性は塞き止められる．

結

luxury と lechery のシニフィエが決定的に分離したのは18世紀であった．後者は過度の性欲を意味し続けたけれど，前者は拡張・深化するブルジョワの消費社会の中で物に対する過度の

欲望を含意するようになる．ただ，市民社会における贅沢品はリアの言う「余計なもの」とは別物である．『リア王』は物の所有と人間のアイデンティティが分離不能な世界である．一方，西欧近代における人間主体は「個人」として制度化されている．「主体」は中世では服従の意味を持っていたが，権利が帰属する自由な主体という観念は，実質的に初期資本主義経済の経験から生まれ，それが法的理念に高まり，同時に哲学理念として確立していった．個人はこうした近代性の土台として位置づけられている[21]．近代では個人が物よりも前に存在し，個人のアイデンティティは物とは分離されている．従って，近代社会の贅沢品は『リア王』の畏れた過剰の未来形態かもしれない．

私たちは物の外部に在って物から疎外された自我という認識論に慣れ親しんできた．ところが『リア王』の登場人物たちが親しんでいる世界は，物それ自体が拡張された身体であり，財産が人格形成の必須要件であるような場所なのだ．つまりそれは，莫大な財産をもてるのは偉大な人間だけであり，とるに足りぬ卑小な人間が巨額の資産をもつことなど認めないという精神の構えに他ならない．このようなイデオロギーが自然なものとして受け入れられているのは，もちろん，過剰なものの多寡が人間の道徳的品位の優劣を下支えしていて，それが階級制度として体系化しているからである．このことは「新しい人間」と批評されてきたエドマンドにも当てはまる．自己の利害に基づいて自由意志で行動する彼は，ホッブス的（あるいはダーウィン的）な弱肉強食・適者生存の権化のように語られてきた．しかし，彼が最後に欲望したのは貴族としての“honor”だった．「私に勝ったこの幸運児はいったい何者だ．貴族であるなら怨みはしない．」(5.3.165 - 6) 人と物の紐帯が切断され，subject と object としてそれぞれ個別の運動を展開する流動的な情況は，この劇を詳細に検討する限り，確認することはできない．しかしながら，人間＝財産（特に不動産）という目に見える関係は，早くも17世紀には株式（あるいは信用取引）という巨大な見えざる力の前に変容を迫られる．物と人が互いを疎外しあう近代というシステムがやがて全てを呑み尽くしていくことは，歴史が既に知っている．

注

1) See Jacob Burckhardt, *The Civilization of the Renaissance in Italy*, trans. Ludwig Geiger and Walter Gotz (2 vols., New York, 1958), I, pp.100-153, and Karl Marx, *Capital*, Vol. I, ch. 1, “Commodities,” in *The Marx-Engels Reader*, ed. Robert C. Tucker (2nd edn., New York and London, 1978), pp.431-5.

2) See Jean-Christophe Agnew, *World Apart: The Market and the Theater in Anglo-American Thought, 1550-1750* (Cambridge, 1986), pp.11-2.

3) See Douglas Bruster, *Drama and the Market in the Age of Shakespeare* (Cambridge, 1992), p.9.

4) See Rosalie Colie, “Reason and Need: *King Lear* and the ‘Crisis’ of the Aristocracy,” in R.L.Colie and F.T.Flahiff, eds., *Some Facets of King Lear: Essays in Prismatic Criticism* (Toronto, 1974), pp.185-219; John Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature: A Study of King Lear* (London, 1951), pp.18-53; Marshall McLuhan, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man* (London, 1962), pp. 11-8; Franco Moretti, “The Great Eclipse: Tragic Form as the Consecration of Sovereignty,” in *Signs Taken for Wonders: Essays in the Sociology of Literary Forms*, trans. Susan Fischer, David Forgass, and David Miller (London, 1983), pp.42-82; Stephen Greenblatt, “Shakespeare and the Exorcists,” in his *Shakespearean Negotiations: The Circulation of Social Energy in Renaissance England* (Berkeley, 1988), pp. 94-128.

5) Quoted from the facsimile of the 1608 Quarto in *The Complete “King Lear”, 1608-1623* (Berkeley, 1989). All subsequent quotes from Shakespeare are from *The Riverside Shakespeare*, gen. ed. G. Blakemore Evans (Boston, 1974). シェイクスピア研究者の多くが拠り所としてきた前提は，シェイクスピアは自分の劇を改訂しなかったということである．従って理論的には，各劇ごとに単一の固定したテクストを確立することも可能な

はずである．しかしながら，私たちの手にすることのできるシェイクスピアの劇の半数は，彼の存命中に印刷されたクウォート版と，彼の死後七年ほど経った1623年に全集として出版されたフォーリオ版の二種類からなっている．クウォート版とフォーリオ版で内容がほとんど変わらない劇もいくつかあるけれど，『リア王』の場合はクウォート版（1608）とフォーリオ版の相違が著しい．しかし18世紀以来，この劇の編集作業は二つの版を融合して一つのテクストを創ることを目指してきた．最近になってやっと，シェイクスピアはこの劇を改訂したのだという想定の下に，二つの版を別個に扱おうという考え方が広まってきた．Cf. *King Lear: A Parallel Text Edition*, ed. Rene Weis（London and New York, 1993）.

6）See Margreta de Grazia, "The ideology of superfluous things: *King Lear* as period piece," in Margreta de Grazia, M. Quilligan, and P. Stallybrass, eds., *Subject and Object in Renaissance Culture*（Cambridge, 1996）, pp.22-3, and *King Lear*, ed. Kenneth Muir（London, 1985）, p.115, n. Ⅲ. ⅳ. 104-5.

7）See D.C. Coleman and A.H. John, eds., *Trade, Government and Economy in Pre-Industrial England*（London, 1976）, p.143.　川北稔『洒落者たちのイギリス史』（平凡社，1993）参照．

8）See James Kavanagh, "Shakespeare in Ideology," in John Drakakis, ed., *Alternative Shakespeare*（London and New York, 1985）, pp.156-60.

9）See Agnew, p. 58, and de Grazia, pp. 24-5.

10）See Coppelia Kahn, "The Absent Mother in *King Lear*," in M.W. Ferguson, M. Quilligan, and N.J. Vickers, eds., *Rewriting the Renaissance*（Chicago and London, 1986）, p.36.　リアは自身の心的状態を"the mother"と呼んだ．カーンはこれをリアの抑圧された母親との同一化の徴候と解釈し，精神分析批評を展開する．父権制社会における男性のアイデンティティは，「女性的」なものとされる心的傾向を抑圧することでかろうじて成立するとカーンは論じる．

11）See Michael MacDonald, *Mystical Bedlam: Madness, Anxiety, and Healing in Seventeenth-Century England*（Cambridge, 1981）, pp.128-32. ベツレヘム病院は一般にベドラムと呼ばれ，ロンドン名所の一つであった．この病院の患者すなわちベドラムの狂人たちは，通常の人間から隔離されていた．彼らは施設の中に閉じ込められ，一種の人間動物園として見世物にされた．ベドラムは精神病者に対処する最も有名な施設であったわけだが，イングランドでは施設はここ一つだけであり，後世の病院のように大規模な建物ではなく，小屋とほとんど変わらないぐらいの普通の家で，30人ほどの患者が非人間的で混雑した不潔な状態で収容されていた．では他の狂人たちは何処にいたのかというと，家の中にいて家族によって世話をされていたのである．彼らはどこか別の場所にやられてときどき家人が訪ねたり，すっかり忘れ去られたりする存在ではなかった．狂人は常にどこにでもいる存在だったのである．

12）See Jean Baudrillard, *For a Critique of the Political Economy of the Sign*, trans. Charles Levin（St. Louis, Mo., 1981）, pp.80-2, and Michael Ignatieff, *The Needs of Strangers*（New York, 1986）, p.35.

13）*Capital*, I. 1. 1.

14）記録によればジェイムズ１世は『リア王』を1606年12月26日に観たようである．ジェイムズは形式的にはイングランドとスコットランドを統合したわけだから，リアのように王国を分断してしまった国王とは正反対の立場にいる．そういう意味ではこの劇はジェイムズに追従的である．彼はエキセントリックであると同時に頑固で融通がきかない男であった．エリザベスの持っていたキツネのような狡猾さとか冷徹な外交手腕や社交術などとは無縁で，政治に関しては怠け者で優柔不断であった．それでいながら家臣の前で演説するときは，横柄で尊大で気取ってもったいぶっていた．それに加えてジェイムズにはホモセクシュアルの傾向があって，気に入った男たちはどんどん出世させて，新たな地位や名誉を与えまくった．それまでのイングランドのルールやしきたりには無頓着であり，配慮も欠いていた．このような国王に対してイングランド人は，国民のシンボルというイメージを抱かなければならなかったのである．彼はリアに似ている．二人の類似点を挙げていくうちに私たちは国王とは何か，そしてどうあるべきかという問題に辿りつく．実は『リア王』は16世紀後半から17世紀前半のヨーロッパにおける政治理論のホットな議論と直接関わっているドラマなのである．この劇では国王の言動の結果，強大な力を持つにいたった二つの党派・政治勢力が相争って結局は共倒れになり，王国自

体はエドガーに継承されていくわけだが，ゴネリルとリーガンに代表される二つの党派とは別にコーデリア・ケント・グロスター・エドガーたちによる「王党派」と呼ぶべき政治勢力が現れる．古代ブリテンを恐怖に陥れるゴネリルとリーガンの二大勢力の専制政治に，コーデリアはフランス王妃として対抗する．この点に関して当時の観客は敏感であった．ジェイムズが国王を継承する40年ほど前，フランスではアンリ２世が不慮の事故死をとげた（1559）後，王位継承をめぐる血で血を洗う争いで国内は分裂し，結局アンリ４世が即位し1590年代になってやっと闘争は収まった．このいわゆるフランスの宗教戦争（ユグノー戦争）から生まれた知的遺産が resistance theory といわれる議論である．この議論は暴君すなわち専制君主に対していつ，どのような形で合法的に抵抗し，あるいは暴君を排除できるのか，というものである．フランスのプロテスタント貴族（ユグノー）の議論によれば，自分たちが国王の臣下として代々受け継いできた権利が国王によって脅かされたとき，抵抗は正当化される．しかし，フランスの政治思想家ジャン・ボダンは，暴君に対する抵抗は別の国の君主の仲裁を通してのみ合法化される，と論じた．この議論に照らしあわせてみると，フランス王妃コーデリアのブリテン侵攻は暴君に対するレジスタンス・セオリーに合致したものと見ることができる．16世紀というのは絶対的な権力をもった君主たちが世界中に現れた時代であった．イングランドのエリザベス，スペインのフェリペ２世，ロシアのイワン雷帝，インドのアクバル大帝，そして日本の織田信長．彼らに共通しているのは，１）商業資本主義を背景にして財政的基盤を確かなものにした．２）宗教情報を一手に握った．３）官僚制と常備軍によって高度な中央集権的性格をもっていた，ということである．彼らが従来の封建的君主と大きく異なる点は，封建的君主は重要な行動（立法／戦争／裁判）に際して，主だった貴族たちと相談をしなければならなかった．貴族や重臣はアドバイスをする権利をもっていた，ということである．絶対主義的君主は強大なパワーをもっているので一切を思い通りに行う．このような君主の登場を理論的にサポートしたのが，イタリアのマキャベリであった．彼は『君主論』などの著作をとおして政治におけるパワーの役割を公然と認めた．政治において決定的なのは正義ではなく権力であり，政治的な目的を達するにはどのような手段も正当化される，という議論を彼は展開したのである．See Nigel Smith, "Forms of kingship in *King Lear*," in *Longman Critical Essays: King Lear*, eds., L. Cookson and B. Loughrey (London, 1988), pp.31-41.

15) See de Grazia, p.32.

16) See Ferdinand Braudel, *Capitalism and Material Life, 1400-1800*, trans. M. Kochan (New York and Cambridge, 1973), pp.121-91.

17) Cf. the relation of blindness to castration in psychoanalysis as punishment for Oedipal crime, Sigmund Freud, "The Uncanny," in *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. XVII (London, 1955), p.231.

18) See Muir, p.167, n. IV. vi. 136 and de Grazia, p.29.

19) Lawrence Stone, *The Crisis of the Aristocracy, 1558-1641*, abridged ed. (New York, 1967), p.271.

20) See Lawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800* (London, 1977), pp.54-5, 151; Peter Erickson, *Patriarchal Structures in Shakespeare's Drama* (Berkeley and London, 1985), pp.103-15.

21) 今村仁司，『近代性の構造』（講談社，1994），147 - 50ページ参照．

〔なかの　ひろみ　横浜国立大学経営学部助教授〕